

朗読『サロメ』

木村克彦

(作新学院大学専任講師)

「川崎淳之助訳、『サロメ』の口上とともに学会の会場が、即、劇場と化した。舞台中央に低い台が置かれ、黒地に白の唐草文様の布がかけられていた。荒井氏の服装は白いシャツに黒のズボン。即ち白と黒という対称的な色を選ぶことにより本劇の対立する様々な要素——聖と俗、pity と pleasure 等を、まず象徴させたように思え、更にそれは、私にはピアズリーの白と黒の挿絵をも連想させた。

各々の人物の読み分けは見事であった。サロメの官能性は言わずもがな。ヨカナンの姿の見えない天水槽からの台詞を、氏は聴衆に背を向けて朗読することで表現された。天水槽からの声なので、かすかに響くように朗読されるかと予想したが、さにあらず。壁面に向かっての朗読であったが、充分過ぎるほどの反響をもって会場に轟いた。考えてみれば予言者の台詞である。力強く断定的な読みが好適であることに気付いた。しかしこの二人以上に強烈な印象を私に与えたのはエロドである。エルマンは『『サロメ』の中心人物はエロド』と述べているが、荒井氏の解釈もこの点を踏まえてのことか。その卑猥なひひ爺ぶりは原作の枠を越えてさえいるように思われたが、作者が『ドリアン・グレイの肖像』について語った言葉、'All excess, as well as all renunciation, brings its own punishment.' は『サロメ』にも連綿として生きているのだ。七枚のヴェールの踊り（氏は艶かしく踊りながらヴェールを一枚ずつ投げ捨てた）を見てのエロドの哄笑——エロドこそ excess と思われた。斬首の場面。前述の布をとると皿と赤い布の塊りが現われた。「死の秘密より大きいのが愛の秘密。ひたすら想うべきは、愛だけだわ。氏はこの重要な台詞を静かに恰も真理を語るかのように朗読された。「殺せ、あの女を！」。ラスト・シーンではテキストが楯と化しサロメの悲鳴の後、髑髏の仮面が掲げられた——白と黒は、生と死のテーマでもあったろう。

